



コンブから見えてくる光景

中林 広一

歴史研究の場、歴史教育の場において一国史の観点のみに基づく歴史の把握はもはや過去の遺物となりつつある。例えば、日本史やフランス史といった枠組みがそれに該当するが、近代的な国民国家が設ける国境線、その内側で完結する物語として歴史を叙述する行為を是とする歴史理解はもはや歴史研究の最前線においては有効性を持たないし、高校・中学といった公教育の現場にあっても一国史の立場に固執する教員は少ないのではなかろうか。

それでは、一国史に代わる歴史理解とはどのようなものか。それは、国境のような政治的障壁の持つ意味を相対化し、それを越えた人・物・情報の動きを重視する捉え方である。こうした観点に基づいて眺めれば、江戸期の日本は周辺地域に対して背を向け、内向していたわけではなく、むしろ「四つの口」(松前・対馬・長崎・薩摩といった対外的な交流の拠点)を通じて人・物・情報の動きが活発であった姿が浮かび上がってくる。中国の王朝である唐の繁栄は自身の實力だけでなしえたわけではなく、ソグディアナ(現在のウズベキスタン共和国近辺)を根拠地としたソグド人が数百年にわたる商取引や交流を経てユーラシアに広く張り巡らしたネットワークに依拠するところも大きかったことが見て取れる。

このような歴史像は何も上記のようなスケールの大きなトピックのみによって形成されるわけではない。私たちの周辺にあるごく身近な存在もまたその構成物となっていることに留意しておく必要があるが、筆者が近年研究の対象としているコンブもその一つとして位置づけられる。コンブと言えは出汁をとるための食材、佃煮などの形で食される副菜であり、また日本以外の地域で食べられているイメージは浮かんできづらい、これが私たちにとっての一般的な感覚であろう。

そのような私たちにしてみると、19世紀後半から20世紀前半にかけての時期、大量のコンブが日本から中国に向けて輸出され、これを盛んに食する中国の人々がいたという事実は意外なこととして受け取られるのではなかろうか。そして、野菜同様の扱いを受け、肉や他の野菜と共に煮物にされるのがポピュラーな食べ方であったと聞くと益々違和感を覚えるかもしれない。

難波の葦は伊勢の浜荻との物言いが脳裏をかすめる話でもあるが、このような中国の人々の利用法を探るべく日本人が中国に渡って市場調査を行って

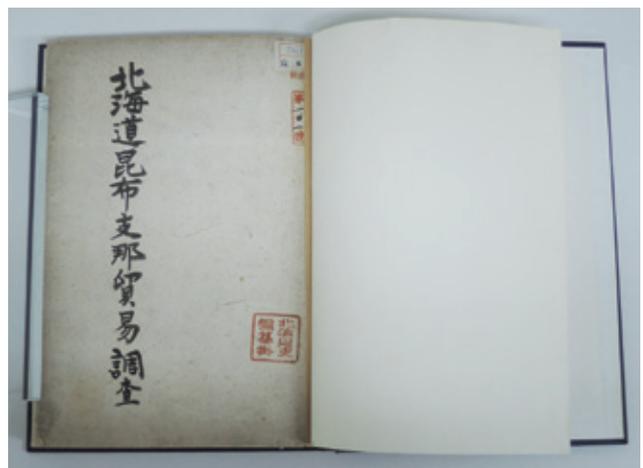
たこともまた興味深い。図として掲げた鹿島万兵衛による報告書などはその一端であるが、コンブに突き動かされて人が足を運び、情報をもたらし、それがまた各地で新たなアクションを呼び起こす、このような国境を越えた動きが生じていたことを想起すると、たかがコンブされどコンブということになる。

とは言え、こうしたコンブをめぐるトピックを取り扱う時、動きのある部分にだけ目が引き付けられるようではそれが持つ魅力も半減する。確かに国境を越えて動く人・物・情報の存在は歴史をより豊かな色彩でいろどるものではあるが、農民のような定住を基本的な生活スタイルとする人々もまたコンブに結びつけられていた事実を見落としてはならない。

コンブに対する膨大な需要、当時の中国においてこれを担っていたのは農民であった。コンブの需要が生じる背景はいくつか存するが、その一つには商品作物栽培に特化し、自家消費の食材の多くは購入物によってまかなう農民の農家経営が関わっている。そこではなるべく多くの金銭を手元に残すべく合理的な判断を農民は下すが、その際歓迎されたのが低廉な価格で購入できるコンブであった。

コンブはこうした定住を旨とする人々も巻き込むだけでなく、本来縁もゆかりも無いような北海道の漁民と中国内陸部の農民をも結びつけている。このように目立つもの、動きのあるものに目を奪われがちな昨今の歴史研究に対する木鐸たりえていることも鑑みるならば、コンブは実に様々なことを私たちに示してくれていることが窺え、その八面六臂ぶりには目を見張るものがある。もっとも当のコンブに顔や手は見当たらないが。

(所員 外国語学部准教授)



北海道昆布支那貿易調査 (北海道大学図書館所蔵)